

平成 20 年度グループ・プロジェクト研究計画書

(フリガナ) 代表者氏名	(スギモト ヒロシ) 杉本 洋	研究科 センター等	知識科学研究科
		研究室名	伊藤研究室
研究課題	文化人類学的調査手法の応用可能性を探る - 現場のエスノグラフィの知見を通して -		
研究目的	人類学的質的調査手法であるフィールドワークおよびエスノグラフィがいかなる(実務的)応用可能性を有するかを探ること、さらにその追求を通じて、フィールドワークおよびエスノグラフィの手法をそれぞれが実践的に学ぶことを目的とする。		
研究方法	人類学的なフィールドワークおよびエスノグラフィについての基礎文献を渉猟し、まずは調査手法の基礎や人類学独自の考え方について学ぶ。とりわけ、アメリカで盛り上がりを見せつつある、人類学の調査手法を用いたワークプレイスや産業界におけるフィールドワーク・エスノグラフィ実践についての成果を学ぶ。その後、それぞれのグループ構成員がそれぞれの現場(学校、企業組織、実験室、健康増進活動など)で継続しているフィールドワーク・エスノグラフィ実践の知見を持ち寄り、ディスカッションを行う。その上で、それぞれ異なるフィールドで行われている調査の固有性を踏まえつつも、応用可能性という観点から知見をまとめていく。		
研究の特色・意義	フィールドワークおよびエスノグラフィは、もともとは文化人類学者が、素朴な伝統社会やコミュニティを綿密に調査するために生み出した調査手法であるが、製品開発や、企業組織のニーズ調査といった実務に応用され始めている。例えば、米国ではインテルや IBM、マイクロソフトなどが、日本でも富士通などの企業が、フィールドワークおよびエスノグラフィの手法の一部を抽出して、応用を進めている。ただし、日本のアカデミズムの中ではほとんど試みられていないのが現状である。グループ構成員は、多様な現場においてフィールドワークを実施している(もしくは実施を計画中である)が、フィールドワークおよびエスノグラフィという人類学的手法の応用可能性、とりわけ、実務的な応用可能性という観点から知見を統合していくことに特徴がある。一方で、日本ではほとんどなされていない人類学的質的調査手法の応用可能性を学問的に探ること、他方で、現場の改善や製品開発等に役立つ知見を得ることに意義が見いだせよう。また、それぞれの現場での知見を統合させるという観点から、対面でのディスカッションもさることながら、3点(本学、新潟、田町キャンパス等)を結び、遠隔通信機器(Mac コンピュータ)を用いたテレビ会議での議論をグループメンバー間で積極的に行う。そうした遠隔地間でのグループワークのあり方も本研究の特色であり、今後の複数メンバーによる研究手法のあり方の進展を考察できると考える。		
期待される成果	それぞれの現場での知見を統合させ、フィールドワークおよびエスノグラフィという調査がいかに現場への応用可能性を持つか、という観点から報告書を作成する。報告書はグループワーク(勉強会)の発表や議論をまとめたものになる予定であり、可能ならば、研究会(北陸人類学研究会等)での発表を行う。		
備考	指導教員：伊藤泰信准教授 メンバー：杉本(D2)、河野(M2)、松本(M1)、園城(統合M1)、水元(D3)、大野(金大D1)		